

# ¡Hola, amigos!

第070号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、日本の友人・知人の皆さんに私達の近況をお知らせする手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は、なるべく毎週、日本時間の金曜朝05:00から07:00時に実施する予定です。臨時休刊の場合は前もってお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。 2005年07月22日 カァディスにてR y N

---

## ☆今週号のトップヘジャンプ

---

現在有効なバック・ナンバーは069号(07月15日)、068号(07月08日)  
067号(07月01日)の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。

---



## 「カナリアの散歩」の巻

先週、リンク・ボタンが変でしたね。原稿ではちゃんと中央にしてたのに、ボタン内の字が右寄せになってしまっていました。今度は余白を点で埋めてみました。これで

うまくいくかどうか？ とにかく、何もかも試行錯誤の連続です。

ところで、各号とも各項のタイトルが色分けされていますね、例えばこの項は青、先週のチョコの話は緑、そしてプラド美術館なんかは赤。そう、以前の身辺雑記的なものが青、呑み食いにまつわる話は緑、散歩・遠足・小旅行は赤。大体こういうつもの

の色分けにしています。

大西洋を散歩、なんてオオゲサな事をほざいたばかりなので、エッ、今度はカナリー島かと思うかも知れませんが、それはおととしの話。いつかまた、行きたいとは思っていますけど、それ以来カナリアスには行ってません。実はこの項の話、私達自身の

散歩ではないんです。タイトルの色も赤ではありませんね。

先週の或る日の午後、二人とも本を読みました。日差しの強い午後は海風に吹かれての読書が一番、そのうちにランチ・ビールが効いてきて眠くなるのがオチです。

眼は活字を追ってはいるものの、もうほとんど頭は受け付けてない、そういう状況でした。そういういい気分でウツラウツラしているときに、覚えてたの小学生の口笛み

たいなピーピーという不安定な音が聞こえてきました。

チッキショー、っるせーな、どこで吹いてんだろー。下の遊歩道や浜からではこんなにハッキリは聞こえないはず。おかしいなー。

クッソー、それにしてもシツコイ。下を覗くためにベランダに出ようとして気がつきました。なんと、ナント、我が家のベランダにお客様だったのです。



Nはもう大変。キャー、カワイイー、とこっちも黄色い声。こうなればNの出番。とにかく動物を手なずけるのは得意中の得意です。早速、水を張ったプラ容器やパンくずなどをソーッと差し出しました。Nを恐れる風でもありませんが、差し出されたものには興味がない様子。右足には黒い足環がついてます。

そのうち、ミントを一株植えたばかりのプランターに移動しました。



良く見ると、頭やほっぺたに灰色の部分があります。いわば産毛ですね。くちばしの色も薄いし、これはどうやら人間ならせいぜい三歳児ほどの幼鳥らしい。カナリアの子供なんでしょう。どうりで、鳴き方が変だったんですね。

藤沢に住んでいた頃、文鳥を三代・通算12年、それとは別にメジロを二羽飼っていました。三代目の文鳥と二羽のメジロのうち一羽はとても長生きで、文鳥は8年以上メジロは15年以上の長寿でした。小鳥の寿命としては記録モノではなかったか？と思います。両方とも家族の一員と思っていたようです。文鳥の手乗りは当たり前ですがメジロまで平気で籠から出てきました。その白文鳥は孵化したばかりでまだ羽毛もろくすっぽ生えてないような時にペット・ショップで買ったものですが、羽が生えそろった後も暫くは真っ白ではなく、このカナリアの幼鳥のように灰色の斑が残っていました。そしてピンクのくちばしも成鳥になるまで色が薄かったと思います。

さて、そのカナリア、ミントの鉢に何の用があるのかな？と見ていると、なんとミントの葉をついばみはじめました。こいつミントをよっぽど気に入ったとみえて、それから約30分、あちこち柔らかさうなところをつつきまわしていました。

いいとこばっかつつついちゃってー。まあ、許そう。そのかわいさに免じて許してしまおう。ミバのいい奴はやっぱり何かと得してるんだなー。

私達はカナリアを飼ったことがないので良く知りませんが、一般的なカナリアの餌は何なんでしょうか。ウチの文鳥は飼い主同様もうやたら雑食になっていました。

青菜では小松菜やレタスなんか食べてたけど、小松菜が一番好きみたいでした。ミントはこの辺の八百屋なら大抵どこにも売ってますが、このカナリアの飼い主は普段ミントを食べさせているのでしょうか。

こうして30分間、気楽に我が家のベランダで遊んでましたが、そのうち来たとき同様フイツとどこかへ飛んでいってしまいました。

これが彼にとってはちょっとした散歩で、無事に飼い主の所へ帰ってくれたらいいんだけど……。ビルから離れて浜のほうへ行っちゃだめだよ、浜の上は物騒なカモメ一家が縄張りを仕切っているからね。

気をつけてお帰りー。また、遊びにおいで。ミント育てておくからねー。\*\*\*



---

## 「ガスパッチョ」の巻

---

暑いところでは塩分をしっかり補給しないといけません。Rは若い頃アジア・アフリカ・南米の熱帯域や特にペルシャ湾の港へ行くと塩の錠剤を飲んだものでした。外気温が40度をはるかに超えるところで長時間汗をかいていると体内の塩分が急速に失われます。これを普通の食事で補うことは難しく、塩の錠剤を呑むことが一番手っ取り早い解決法でした。気温が極端に高く、なおかつ湿度が低いと、汗はかかず、いきなり皮膚が塩の結晶でざらざらしてきます。汗をかかず、という表現は正しくないですね。本当は、汗をかいても水分は瞬間的に蒸発し塩分だけが皮膚に残る、というべきでしょう。そういう暑さはペルシャ湾航路で散々経験しました。

ペルシャ湾、船乗りはPGと言ってましたが、その後陸上ではアラビア湾という呼び方が一般的になったみたいです。それでも船乗りはずっとPGで通していました。少なくともRの周りではそうでした。ペルシャの地名は湾の東、アラビアは湾の西。



この問題の多い湾の名になぜ反対側の地名を乗せなおしたか？ ごく最近のイギリスの世界地図ではただ“The Gulf”(湾) となっていました。日本のはどうでしょう？ イラ・イラ戦争の頃は湾の一番奥にあるクウェイトという港まで何度も行きました。南米チリの港からリンゴ・ブドウ・洋ナシなどをPG諸港に運ぶ定期船に乗っていたのです。当事、湾内には機雷が敷設されているという情報がしきりでした。そんなこと言われたって何の装備も持たない商船では目視観測で発見するしか手はありません。手すきの乗組員を皆ブリッジに集めて一つでも多くの眼で見張りをすることに専念しました。そして、日没後はエンジンを止めて漂泊するか、手近に適当な錨地があれば錨泊したり……。薄氷を踏む、とはこういうことかという思いでした。機雷は水面下か、あるいは海底にある可能性のほうが大きいので、日中の目視による見張りや夜間航行をしないことはほとんど無意味かも知れませんが、万が一機雷にやられるとしても、日中、あたりが見えるときの方がまだマシと考えたのです。こんな思い出も今は昔。話がガスパッチョから飛んだ脱線をしました。本題に戻ります。



1 L 当り 2 ユーロ弱から 3 ユーロ前後まで色々。標準的な材料は、トマト・ピーマン・キュウリ・タマネギ・オリーブ油・ワインビネガー・塩・ニンニク・レモン。

私達がこの国へ来て最初に食べた市販のガスパッチョはとてもショッぱく感じられました。こりゃイカンわ、こんなもの食べてたらいずれ腎臓を病むことになる、と思いました。だから、それっきり市販の紙パックには手を出さずに来たんです。

五月末、日本から帰ってきたらアンダルシアはもうほとんど夏。今までは素通りしていたスーパーのガスパッチョの棚がにぎやかになっていました。そして“OFERTA”お買い得の黄札につられてワン・パック買ってみました。真ん中のがそれですがこれが大当たり、今迄に持っていた市販ガスパッチョのイメージを払拭してくれました。

ショッぱいという感じがしなかったのです。

その日はたまたま暑い日で、昼食時に何か冷たいものを欲しいと思っていたときだったので絶妙のタイミングだったんでしょう。そういえば最初に買ってショッぱいと感じたのはスペインへ来たばかりの11月のことでした。

ヤッパリこのスープは、体が塩分を要求するアンダルシアの夏にこそふさわしいものだったんですね。そりゃー塩の錠剤を飲むよりこっちのほうがイイに決まっています。

昼食担当シェフも一品手抜きできるしネ。\*\*\*



---

## 「サンタ・カタリィナ城」の巻

---

紀元前11世紀、既にフェニキア人によって港として使われていたというカアデイスは、その後も天然の良港としての歴史が続いてきました。

どこでも良港と言われる場所は、侵略を目論む外敵の足掛りとして標的にされるのが宿命と言えるでしょう。カアデイスも数々の戦乱の歴史を持つようです。

むずかしい歴史の話は歴史好きの人にお任せしますが、スペイン本土から突き出した細長い半島の先端にある町、言い替えれば広い内湾を抱えた防波堤の先端にあるようなカアデイス旧市街は本土からはほとんど孤立しているわけで、自衛のための築城は必然だったと思います。

中世の頃、欧州や中国の都市では町全体が城壁で囲まれていたという所が珍しくなかったようですね。そして今でもその一部が残っている町も多いのでしょう。

私達が行ったことのあるスペインの町では、アルハンブラ宮殿で有名なグラナダが典型的なその一例で、今でもそこここに当時の市街を取り巻く城壁が残っています。

カアデイス旧市街の場合も街全体が城壁に囲まれているようなもので、内陸のそういう都市、例えばグラナダ等と違うところは、街の周囲には城壁の替りに海面から高く切り立った岸壁があり街はその上に造られているということです。

旧市街の周囲は内海側の港湾部分を除いて全て切り立った岸壁で囲まれています。

岸壁の高さは10メートル位から12～3メートルほどでしょうか、それはそのまま旧市街全体の地面の標高でもあります。そして旧市街の周囲には防衛の拠点である城砦の跡が四箇所に残っています。次の画像は現在の旧市街の絵図ですが、右上の港湾地区を除けば中世の頃の形がそっくり残っていると言っていると思います。

右端にある城壁はプエルタ・デ・ティエラ Puerta de Tierra。現在は新市街と旧市街を分けるシンボルでしかありませんし、名称もプエルタ＝門で、城とは言っていないですが、前面には空堀などもあって明らかに戦闘用の構造物と見えます。ここは半島の付け根方面、即ち現在の新市街側からの攻撃に備える城砦だったのでしょう。





次に画面の左下、海中に突き出た城、これは我が家のベランダからの写真で毎度おなじみのカスティーヨ・デ・サン・セバスティアン **Castillo de San Sebastián**。

これは海からの攻撃に対処するもっとも強力な防衛拠点だったのでしょ。現在も軍の管理下におかれ、その中心部にある灯台はカアディス港へ出入する船の格好のランドマークとなっています。

そして、そのすぐ上、星型の城がありますね。これが今日のテーマ、カスティーヨ・デ・サンタ・カタリィナ **Castillo de Santa Catalina** です。

この画像の上方がだいたい北と言っているのですが、旧市街の北の角に小さな茶色の構造物があるのが分かりますか？ バルアルテ・デ・ラ・カンデラリア **Bararte de la Candelaria**。これが四つ目の防備です。前二者がカスティーヨ＝城とっているのに比べ、バルアルテ＝堡塁とっているだけに前二者よりはやや小規模です。



カスティーヨ・デ・サンタ・カタリィナを水平面で見るとこの通り。あまり猛々しさは感じられませんね。築城当時はもっと城らしかったのでしょうか？ 基本的には大きな変化はしてないんだらうと思います。このあたりは険しい岩礁地帯で大型船は近づけず、当時の火器の性能ではなかなか攻めにくかったのでしょうか。もちろん近代兵器ではこんなものはひとたまりもないでしょうけどね。

現在、内部は博物館兼美術館みたいなもので、美術関係の展示物はしじゅう入れ替わっているようです。有難いことに入場は無料なのでちょっと遠い散歩で何回も行きました。この、前の海は周りの岩礁に囲まれて、波静かな海水浴場になっています。ところで、右手の建物にご注目。私達がカアディスに移り住みたいと思い始めてすぐ頭に浮かんだのはこのピソでした。カアディスにくるたびに、不動産代理店にあのビルはだめか？と聞き続けましたが、答はいつもノーでした。

夕日だけでなく、カアディス港の出入港船が眼下に見える最高のロケーションなのです。たとえ出物があっても到底私達が手を出せるようなシロモノではなかったでしょうね。例の19億円が当たったら最上階ワン・フラット買い切ってしまいたい。



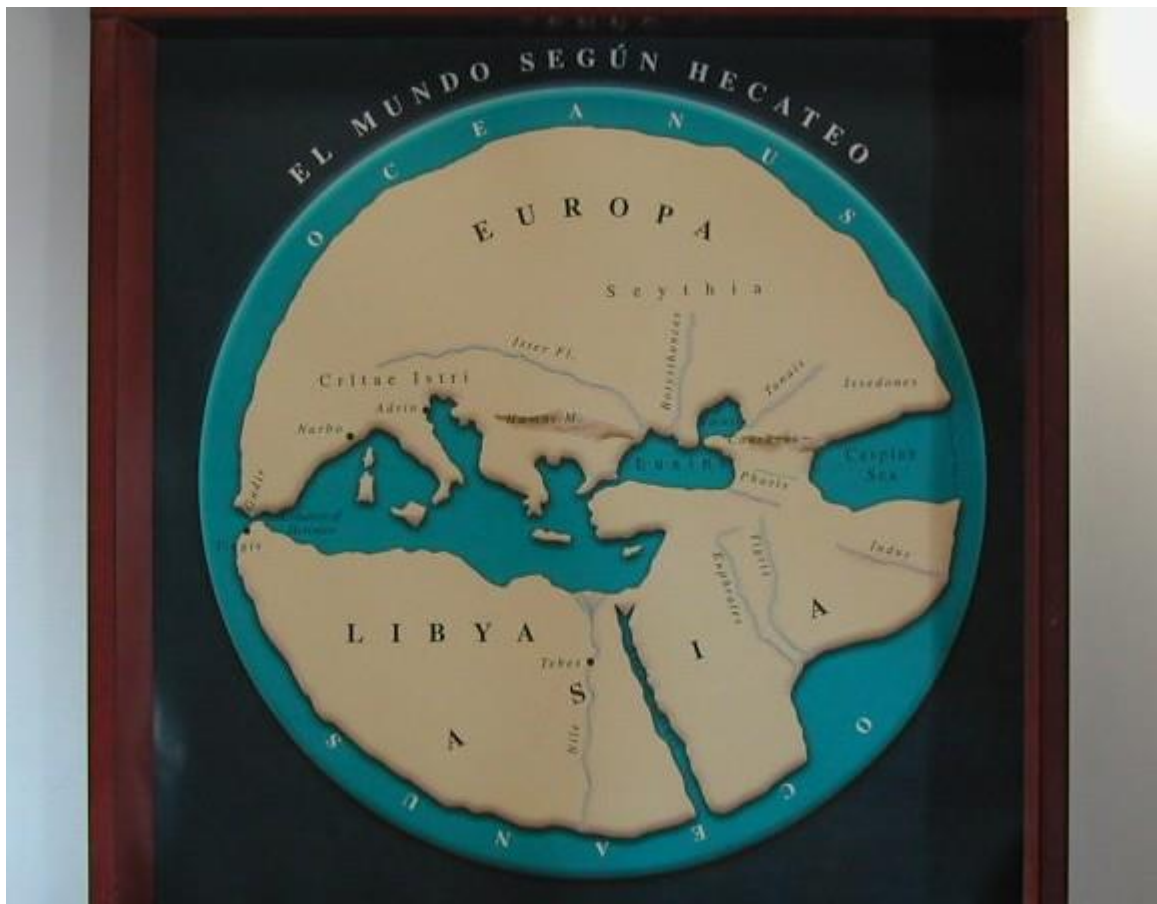


内部は管理棟、博物館、ギャラリー、礼拝堂などに分かれています。礼拝堂は建造年代を見ると築城当時からのものらしい。エッ、城の中に礼拝堂？と思いましたが、戦闘では当然死者も出るんだから当然か。用意がいいね。中庭では時々野外コンサートもあります。左手に見えるような、穴が一杯あいた褐色砂岩で造られた建物は、こんなふうに外の日差しがクラクラするくらい強くても中はヒンヤリです。こういう石は、言ってみれば天然の穴あきレンガで、断熱効果は高いのですが、どう見ても頑丈ではなく、小火器の弾があたっただけでも簡単に壊れてしまいそうです。この城が完成してからは大きな戦闘はなかったらしいのが幸い。



元航海者・地図大好き人間のRの興味を引くのは博物館に展示してある古地図の数々です。古地図をじっくり見ていると当時の人の外界の認識、世界観がおぼろげに想像できて面白い。上2枚のうちの上の方では、世界は地中海を取り巻く国々だけだったのか、アフリカなんか地中海・紅海に面したところだけしか存在してません。





2枚目の地図では少し現在の形に近づいたかに見えますが、東の端にある小さな二つの島は日本と台湾か？またはフィリピンとインドネシア？？

三枚目は丸い図になって地球が丸いんだということ暗示しているのか。だけど日本はおろかイギリスさえもハシヨられています。遙か東方のちっぽけな島の存在は知らなくても仕方がないと思いますが、ごく近いイギリスが描かれてないのは不思議です。取るに足らぬ蛮地としてネグッてしまったのか？ アフリカの南はアジアの一部か？それに引き替え、イタリーの長靴、シシリー・コルシカ・サルディニア、ギリシャ、トルコ、クレタ島、キプロス島、黒海、シナイ半島などはかなり正確に描かれています。これらは皆、歴史に登場する地名ですね。

前にジブラルタルへ行ったとき、その最先端、ヨーロッパ・ポイントというところで見えたモニュメントには、「昔はここが地の果てと考えられていたのだ」という意味のことが書いてありましたが、この地図ではまさにジブラルタル海峡がこの地の西のハズレ、その先は何にもないと考えられていたことを示しています。

さて、この三枚の地図の描かれた時代の順序はどうだったと思いますか？



次はカアディス半島および内湾の地図または海図？の一部ですが、下のほぼ同じ範囲の現在の航空写真と比べるとかなり正確に描かれていることが分かります。この地図が何年頃描かれたものかシカと分かりませんが、1598年築城開始のカステイヨ・デ・サンタ・カタリィナは描かれていませんからそれ以前のものと考えられます。百科事典によると伊能忠敬とその弟子達がいわゆる伊能図と呼ばれる日本全図を完成させたのは1821年だそうです。そうすると上の地図はそれより200年以上前に描かれたものらしい。しかも湾内の水深まで記入されているところが泣かせます。この頃は航海時代に入っていて内湾の水深は航海者にとって欠くことのできない情報だったんですね。地図編纂者が既にそういう要求に応じられたという事も素晴らしい。これぞ海洋民族の証、200年どころの差ではありません。



ヒトがほとんど行かない屋上、というか最上部へ行ってみました。

「夏草やつわものどもが・・・」という風情。だいたいこの城址、入場無料なのにあまり人が来てないんですね。いつ行っても殆ど借り切り。地元住民はイマサラ、なんでしょうし、忙しい観光客はこんなマイナーな旧跡は素通り。そのせいかな、ここのトイレはカァデイスでは四つ星ホテルのを除いて多分一番キレイじゃないかな？\*\*\*

---